

[048] 史淵表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2338983>

出版情報 : 史淵. 48, 1951-09-05. Faculty of Literature, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

彙報

九州史學會昭和二十六年度

春季學術大會

九州史學會恒例の春季學術大會は西日本史學會と共同主催の下に六月二日(土)、三日(日)の兩日九州大學文學部において開催された。第一日午前は各部會の研究発表、午後は西日本史學會各支部代表の研究発表が行はれ、第二日は午前、午後に亘り、それぞれ各支部代表研究発表(前日の續き)、公開講演があり、最後に大分縣下安國寺における住居趾發掘の映畫及び幻燈の映寫があつて全日程を終了した。今回もまた各地よりの參會者も多數に上り極めて盛會であつた。本學術大會の活動が年とともに盛になりつゝあることは斯界のため御同慶にたえないところである。なほ大會における公開講演ならびに研究発表の題目は次の通り。

公開講演

明治初年
豆州内浦漁業制度改革史攷

——豆州内浦漁民史料による——

隋末の亂と豪族

各支部代表研究発表題目

明代における老人の裁判

(山口)小畑龍雄

祝 宮 爵
鈴 木 俊

肥後における天神信仰について

クリミヤ戰役中のビスマルク

新中國と天主教の問題

漢代に於ける疆本弱枝政策についての一考察

史前日向の漁撈圈について

考古學上より見たる松浦地方古代文化に關する二三の問題

各部會研究発表題目

日本史部會

筑後古代史考

佐賀縣における梵字金石文について

事代主神について

萬葉集に現はれたる水島についての一考察

奈良時代に於ける日向と中央とのある種の交渉

畿内庄園に於ける名の構造とその分解について

——大乘院領若概庄の場合——

幕末に於ける將軍建儲運動の理念について

——橋本左内の場合——

東洋史部會

五代の控鶴軍について

舊唐書職官志に見える賦入四種中の課について

兩税法制定の事情

摩訶耶教について

幕役法創始に關する司馬光の見解

翰林學士院について

(熊本)杉本尙雄

(長崎)田中友次郎

(福岡)伊東隆夫

(大分)橋詰安四郎

(宮崎)田中熊雄

(佐賀)松尾禎作

波多野院三

飯田一郎

深溝徳味

木村理輔

柳 宏 吉

池 田 勝

山 口 宗 之

菊池 英 夫

松 永 雅 生

田 村 卓 夫

撫 尾 正 信

河 原 由 郎

矢 野 主 税

契丹の越王城について

北史西域傳の成立

太監亦失哈について

西洋史部會

古代農業の合理性

莊園構造論の諸問題

——とくに直營地について——

東ローマ皇帝アレクシオス・コムネーノスについて

エマヌエル・パールについて

カルヴァンとジュネーヴの社會的背景

ナポレオン三世の關稅政策とフランス産業

十二・三世紀の教會改革について

(以下未發表)

都市貴族について

J. B. Gieser の天才論について

考古・民族・民俗學部會

觀世音寺(佛像)様式の展開と球磨地方様式との對比について

筑前宗像神湊員塚調査概報

豊前京都犀川の古代住居跡について

御物聖德太子畫像について

平戸島根獅子彌生式人骨の供覽

——拔齒と銅鏃片の穿入殘存せる稀有の例

研究發表要旨 (到着分のみ)

日本史部會

佐賀縣に於ける梵字金石文について

飯田 一郎

我々が梵字と呼んでいるのは古代印度の言語 Samskrita を書くために使われた文字のうち Siddham と呼ばれた書體のもので大體西紀四五世紀頃に印度に流行したものであります。(荻原博士實習梵語學九五頁)。それが中國を経て日本に傳えられたのですが、その傳來に最も重要な役割を演じたのは空海で、その請來目錄には「梵字眞言讚等都四十二部四十四卷」が列擧されています。(弘法大師全集卷第一、七一—九〇頁)

その後我國で梵字は眞言並に種子を書くために使われ、平安末期から鎌倉時代にかけてかなり普及したようです。佐賀縣には鎌倉の建治年間から昭和の現代に亘つて金石文として使われた證據があります。字の種類は四十餘り、最も多いのは古來ア(胎藏大日)及びキリタ(Hrin 阿彌陀)と呼ばれたものです。珍らしいものとしては天照大神に五轉具足の胎藏界大日及び金剛界大日の種子が使われた例が夫々數點あること(寛文—寛永)などであり

金關 丈夫

奈良時代に於ける日向と中央との 或る種の交渉

柳 宏 吉

宇佐八幡の禰宜大神朝臣杜女と主神(モリメ)大神朝臣田麻呂とは、嘗て東大寺に於ける或る日の盛典の花形であつたが、厭魅のこと發覺に由り、右大臣豐成の子で後に參議にまでなつた藤原朝臣乙繩は橘奈良麻呂の事件に坐し、又大津大浦は和氣王の謀反に關係ありとて、何れも日向に遷された。すべて古事記、日本書紀の編纂より三四十年を経た頃のことである。奈良の朝廷が記紀の神代の卷の部に於て、周知の如き重要な地位を日向に與えておいて、やがてその日向を右四人の謫降の土地としたのは、どうしてであるか。試みに二三の場合を想定してみれば、記紀が日向に與えた地位は、もと／＼政治面で考慮せらるべき性質のものではなかつたのか。或は最初は記紀の撰修方針(創作かどうかは將來の問題として)が政治の方針でもある筈であつたのが、三四十年の歲月のためか、又は何か他の事情によつてか、それが變つて來て日向の如き土地を配所とするようになったのもあるらうか。

事代主神について

深 溝 徳 味

記紀神代史國護りの説話に於ける事代主神の歴史的根據については、今日この神を以て民間信仰の神となす説と神代史上の神に過ぎないとする説とが對立している。私見では前説を是とし後説

を非とするものである。その理由を述べると、先づ國護りの話の原型には事代主神の話はなかつたものと思われる。その根據は次の通りである。

A 國護りの話は事代主神の話があるために不自然なものとなつてゐる。

B それは大和朝廷に於けるこの神に關する政治的慣習に基いて作られた話である。

C 書紀註記の或る一書にはこの神に關するこの話は全く見えない。

次に國護りの話に於けるこの神に關する或る記事は、この神が本來狩獵社會に發達した民間信仰の神であつたことを物語るものであり、延喜式に見える大和葛城鴨神としての事代主神との歴史的關連を示唆するものである。

西洋史部會

東ローマ皇帝アレクシオス・

コムネーノスについて

長友榮三郎

The American His. Review, Vol. LV, No. 4 所載 Ein Joranson の「フランダーメ伯宛アレクシオス皇帝の僞書簡の問題」に關連し、皇女 Anna Comnena の著作たる「Alexiad」を參照しつゝ、アレクシオス皇帝(1081-1118)の性格や特異な政策について述べる。アレクシオス治下のコンスタンチノポリスは、

北から Patznakaj、西からノルマン、東から Kijidi Arslan に率いられる Seljuk Turks により脅威され、ヨーロッパ人の眼は厳しく此の地に注がれていた。彼が一方では十字軍の指揮者たち、に懇懇な態度を示すと共に、他方ではセルジュク・トルコとの友好を維持せんとする政策をとつていたこと、その故に西歐人事によつて彼の政策が屢々卑怯な、叛逆的なものとして傳えられるに實を究明する。"Alexad" の様な皇帝に對する良好な史料と、いわゆる偽書簡やその他主として十字軍從軍者により書かれた悪材料を比較検討し、彼の政策が結局は、東西兩世界に挾まれたコンスタンチノポリス保持の目標から出たものであることを結論づけたい。

考古・民族・民俗學部會

觀世音寺(佛像)様式の展開と球磨地方

様式との對比について

牛島 盛光

佛像様式變遷を人類學的(マルチン氏の人體計測法)に考察して見ようと云う試みに於いて、資料として計測したのは、古美術に於ける九州の四地方様式の一と指摘されている(矢崎美盛著「様式的美學」)熊本縣球磨郡所在の佛像群であつた。この調査によつて一地方内に於ける各時代の様式變遷に就いては一應の結論が出た譯であるが、(西日本史學第七號要旨所載)第二の試みとして、佛像に於ける地方様式の展開の仕方を相互に比較しているのである。その第一として九州に於ける他の有力な地方様式觀世音

寺様式(矢崎氏の所謂福岡地方様式)を取上げて見たのである。(昭和二十五年、春、觀世音寺佛像群の計測調査)その結果、或種の示數に於いては著しい相違を示し、(様式展開の仕方における相違を意味する)或る種の示數に於いては案外類似性のあることが證明された。我々の佛像鑑賞・批評に於いて意識以下の部分の不明瞭の爲しばしば墮り易い錯覺も本方法に依つて或程度修正されることが判つた。次の課題として大分地方様式と前二者との對比を試みようかと考へている。

史學懇話會

第三十五回(六月十六日)(土)

「ソ連邦の經濟地理」と題して、第一分校助教授三上正利氏の研究發表が行はれ、今日我々の關心深い問題について興味ある説明を聞くことができたのは收獲であつた。出席者三十三名。

西洋史學科の動向

研究室で引續き行はれている西洋史研究會の活動狀況は次の通り。

第二十回例會(六月二十二日)

(一) (題目) 十六世紀イギリスの農民抗爭

(發表者)

奎尾 昭忠

(二) (題目) ビョートル大帝時代の農奴について

(發表者)

古森 利雄

昭和二十六年五月以降

交換受贈雜誌論文目錄

(到著順)

一橋論叢 第二十四卷 第五號 東京商大

特集 哲學 大阪大學 藤直幹編

古代社會と宗 天照大神と伊勢神宮の起源

神々の來臨—古代史資料としての神話と傳説

風土記に於ける國の觀念

古代佛教制度論 上代の地方政治

古代村落と郷制里

東方學報 第二十册

八旗滿洲ニルの研究 東京夢華錄の文章

清末變法論の成立 勞幹氏の「比魏洛陽城回復原」を評す

陶弘景の本草に對する文獻學的考察

朝鮮水産業の開發過程

法文論叢 第二號

敬語的人稱の概念

若竹書房刊

直木孝次郎

梶原和夫

横田健一

井上 薰

門脇 二

岸 俊男

京大人文科學所

研 究

八 矢 義高

小野川秀美

森 鹿三

渡 還幸三

吉田 敬市

熊本大學

石坂正藏

譜形式におけるイデアの探究

ゲーテにおける自然研究の意義

詩經修辭における賦比興の分類

明と暗と—ステイヴンソン小論

東北大學文學部 第一號

詩篇五一篇の譯解にあらはれたタルターの信行論

孟子の研究

ヘッベルの『ゲノヴェーリア』について

タルカ・パーシヤ—印度の論證法—

仰詔村住居址と家なる文字との關係

新撰字鏡の本文について

中世に於ける神人の活動

東洋文化 第五

中國社會の「封建」とフューダリズム

家族主義社會の道德

日本における古代國家の形成

人文研究 第二卷 第五號

長 音(上)

部民制の一考察

佐竹哲雄

高野 巽

松本雅明

山田昌司

東北大學文學部

眞方 敬道

金 谷 治

柴田治三郎

金 倉 圓照

曾我部 靜雄

佐藤喜代治

豐 田 武

東京大學

東洋文化研究所

仁井田 陞

築島 謙三

井 止 光 貞

大阪市立大學

濱 田 教

直木孝次郎

「ヴオリユプテ」におけるサント・ブーヴの諸相 (八)

經濟情勢 第二六〇號

史 學 第二十四卷 第四號

西洋中世初期の奴隸と教會

唐人士人の郡望について

町人請負新田の性格と機能

前田家藏金剛童子隨心咒に就いて

史學雜誌 第六〇篇 第五號

一九五〇年の歴史學界—回顧と展望—

法學論叢 第五十七卷 第三號

エールリッヒの法社會學について

英國初期の工場法と救貧法

考古學雜誌 第三十七卷 第三號

地形上より見たる貝塚

遼の聚落遺跡

我が國に於ける巨石記念物(續)

造型的立場より見たる銅鐸の研究

東九州に於ける押捺文土器と彌生式土器

鹿兒島縣大隅半島における地下式横穴調査概報

大坪 一

三菱經濟研究所

三田史學會

近山 金次

竹田 龍兒

中井 信彦

岩井 大慧

東京大學史學會

—回顧と展望—

京大法學會

磯 村 哲

片岡 昇

日本考古學會

酒 詰 仲男

島田 正郎

駒 井 和 愛

松原 岳南

賀川 光夫

櫻井 清彦